

紫式部日記における歌の場面について

原 田 敦 子

紫式部日記には、全部で十八首の歌が含まれている。と同時に、紫式部は「式部自撰の家集を源泉として伝来されたものと考えられる」^①紫式部集をも有し、このうち両者にまたがって収載されている歌は、実に十五首を数える。^②勿論紫式部集は、その収載歌の詠作時期から考えて、紫式部日記より後に編纂されたものであろう。従って紫式部日記から家集への歌の収載は考えられても、逆の関係は成り立ち得ない。一方紫式部は、家集に

曆に初雪ふると書きたる日、目に近き日野岳といふ山の雪いと深
う見やらるれば^③

なる詞書があることからして、早くから（ここで詠まれた歌は、宣孝と結婚前の越前国在住時代のものと思われる）座右に「初雪ふる」の如き注の入った仮名暦を置いて、その余白にその時々^④の出来事や感想、さらには歌を書きつけていたものと思われるし、また一方には歌反故の如きものも残っていたのではないかと想像され、日

記、家集両者共通の源泉となった資料を想定することも可能である。とすれば、一定の状況のもとで詠まれた同一の歌を日記、家集ではどのように扱っているか、それを比較することにより日記作者としての紫式部の意識、更には日記における歌と散文の位相をも探りうるのではないかと思う。以下はこの問題解明のための一つの小さな試みである。

「秋のけはひ入りたつままに……」^⑤で始まる日記冒頭の流麗な一文が、秋の土御門殿の情趣をではなく、秋の或日の夕暮の同所の景を描いていることについては、既に益田勝美氏の詳細な御分析がある。^⑥そして氏によれば「日記の作者は先づ土御門殿での御座前の景趣に筆を起し、或一日を頭に浮かべて、夕―夜―暁と辿って朝に及んだ時、道長の女郎花の一件があつて、ここに至るや、作者の回想は忽ちこの特別な事件の為に、時間の糸を離れて、事がらの糸で辿られる」^⑦のであった。

(日記)

渡殿の戸ぐちの局に見いだせば、ほの
うち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、
殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水
はらはせ給ふ。橋の南なる女郎花のい
みじうさかりなるを、一枝折らせ給ひ
て、几帳の上よりさしのぞかせ給へり。
御さまのいとはづかしげなるに、わが
朝がほの思ひしらるれば、「これ、お
そくてはわるからむ」とのたまはする
にことつけて、硯のもとによりぬ。

女郎花さかりの色を見るからに
露のわきける身こそしらるれ
「あな疾」と、ほほゑみて、硯召しい
づ。

白露はわきてもおかじ女郎花
心からにや色のそむらむ

(寛弘五年七月)

言うまでもなく、歌集では歌が主で詞書が従であり、詞書は「い

紫式部日記における歌の場面に ついて

(家集)

朝霧のをかしきほど
に、おまへの花ども、
色々に乱れたる中に、
女郎花いとさかりなる
を、殿御覧じて、一枝
折らせさせ給ひて、几
帳のかみより、「これ
ただにかへすな」と
て、たまはせたり
女郎花さかりの色を
見るからに
露の分きける身こそ
知らるれ
と書きつけたるを、い
と疾く

白露は分きても置か
じ女郎花
心からにや色の染む
らむ

つ、誰が、どんな事情で「歌を詠んだか、即ち歌に至るまでの状況
を簡略に説明することを旨とするのに対し、日記や物語では、散文
は歌と同等、時には歌以上の表現価値を有する。右の例でも、日記で
はまず式部の視点が「渡殿の戸ぐちの局」と説明され、「朝の霧も
まだ落ちぬに、殿ありかせ給ひて、御隨身召して遣水はらせ給ふ」
絵画的情景が設定された後、式部の心理にまで筆は分け入ってゆく
のである。日記、家集ともに女郎花の花の授受が歌詠作の契機にな
っていることに違いはない。しかし日記においては、「はづかしげな
る」道長の前にさらされた、恐らく朝化粧もまだすましていない、
さだすぎて美しくもなかったであろう式部の姿が、彼女自身の筆に
自虐的に写しとられることによって、女郎花にたとえられる道長の
栄華に対し、露の恵みから分けへだてられたという式部の身の上
が、刺すような痛みをもって詠いこまれる。歌の贈答に見るかぎ
り、これは主人と女房との機智に富んだみやびな行為であるに違
ない。主家の栄華を今を盛りと咲き誇る女郎花にたとえ、自身の姿
のみじめさを謙退して詠いあげることによって、主家繁栄のめでた
さは尚一層の輝きを増す。その意味において、式部の讃嘆と卑下を
はぐらかし、歌の主題を女郎花の花そのものに転じ限局した道長の
返歌も、天晴れなみやびの行為と賞讃され得よう。

紫式部は既に日記のこの前のくだりににおいて、己が仕える中宮彰

子の「近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞こしめしつ、なやましうおはしますすべかめるを、さりげなくもてかくさせ給」う立派な御様子を、この世を憂しとする「うつし心をはひきたがへ」讚美している。またこの女郎花の贈答の次の条では、「しめやかなる夕暮」における頼通との物語の「しめじめとして」「心にくきさま」を叙して、「物語にほめたるをとこの心地し待りしか」と頼通に讚嘆のことばを贈っているのである。ここまでくれば、我々は式部の意図に気づかずにはいられない。式部はこの後の九月九日の条に偷子より菊のきせ綿を贈られた風流を叙することによって、自らが仕える主家の主要な人物四人を日記の初めに紹介し、それらの人々と自身の交流を記すことによつて、中宮女房としての己が地位を道長一家のからもし出す文化的雰囲気の中に欠くべからざるものとして定位すると同時に、これらの人々のみやびを知る行為を賞揚したのであった。道長との歌の贈答の一件もそのようなものとして確かに把握しうるであろう。だが和歌前文の

御さまのいとほづかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば
を想起するとき、我々は単なる「みやび」の贈答、主家の栄華の讚美とだけでは割り切ることのできない、式部の心の「おり」の如きもの

を感じずにはいられない。天下一の実力者であり、恐らくは式部の文化的パトロンであったとも思われる道長と対等の歌の応酬をしな

がら、式部にはそのことを得意に思わぬでもない自己と、その自己をつきはなして凝然と見するもう一人の自己が意識されている。それはこの日記の冒頭に記されている、中宮御前の有様のめでたさに「憂き世のなぐさめには、かかる御前こそたづねまあるべかりけれと、うつし心をはひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるる」自己と、その自己を「かつはあやし」と凝視せずにはいられないもう一人の覚醒せる自己に描かれた図式と共通するものではなかつたか。同様のことは、前述した偷子との交渉においても言いうるのである。

九日、菊の綿を、兵部のおもとのもてきて、「これ、殿のうへの、とりわきて。いとよう老のごひすて給へと、のたまはせつる」とあれば、
菊の露わかゆばかりに袖ふれて
花のあるじに千代はゆづらむ
とて、かへし奉らむとするほどに、あなたにかへりわたらせ給ひぬとあれば、
ようなきにとどめつ。

(寛弘五年九月九日)

日記に記された兵部のおもとを介しての偷子の伝言は言わずがな

九月九日、菊の綿を上
の御方よりたまへるに
菊の露わかゆばかり
に袖ふれて
花のあるじに千代は
ゆづらむ

のことであつた。「菊の綿を上るの御方よりたまへるに」とした家集の詞書で、偷子の意図は充分に読みとれるのである。それをあえて使者のことばとして記したところに日記の冗漫さがあればあると言えるし、またそのことばを記すことによつて、偷子の風雅な心遣いに感動する式部の心が写し出されたのだとも言えよう。が、日記の含む問題はそれだけに終らない。家集を読む限りでは、偷子の心遣いに感激した式部が偷子の延命を願う賀歌を詠んで奉ったと解されるが、日記では決してそうではないのである。

かへし奉らむとするほどに、あなたにかへりわたらせ給ひぬとあれば、ようなきにとどめつ。

歌集においては左註として扱われるであらうこの一文が日記に書き加えられることによつて、精一杯の賀歌を作つて偷子に奉らうとし、それが無用のものになつて取り残された式部の孤愁とみじめさが浮き彫りにされる。主人筋の偷子の風雅な心遣いは、それを受けた式部に何程かの誇りと感動を与えた。しかし当の相手への式部の反応は、見事肩すかしを食わされたのであり、そのことにより式部は、一介の中宮女房でしかないわが身の程を心痛くも思い知らされたのである。「ようなきにとどめつ」の一言には、限らない痛憤と共に、我が身の程も考えずに感激した自身の軽率さへの自嘲がこめられている。

紫式部日記における歌の場面について

式部は、美の風景を眼前にして、「うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし」と反省しつつも、道長家の人々のかもし出すみやびの情趣を無意識に讃仰し、それを筆にせずにはいられなかつたのであるが、——そしてそれは王朝宮廷社会に生きる人間の催すべき感懐としていわば高飛車に定められたものであつたが——そうしたみやびの世界、栄華の諸相から疎外された自己に立ちかえるとき、己の内なる憂悶と宮仕え人のみじめさが鈍色の孤愁となつて自己をとりまくの感ぜざるを得なかつた。既述の如く、紫式部日記の日記的部分は、道長家から要請された道長家栄華の記録としての始発を有し、式部は主家の要請にこたえるたぬ、その栄華を証す事実を一つ一つすくい取り、叙述してゆかねばならなかつた。順序は前後するが、寛弘五年八月の上旬～中旬のことと思われる播磨の守の基の負わざの日の御盤の趣向と洲浜のほとりの水にかきませられた賀歌

紀の国のしらの浜にひろふてふ

この石こそはいはほともなれ

は、そのかみの天禄四年円融院・資子内親王乱基歌合をも想起させる風雅なものであつたらしく、この一件は当日式部が他出している実見していないにもかかわらず、中宮御産前の道長邸の美的環境を示すものとして、わざわざ日記中にとりあげられている。しかし式

部はこと自身に関するかぎり、決して平静ではありえなかつた。この日記の散文部分には、眼前の対象から自己内面の憂悶へと回帰してゆく思考のパターンが幾度か示されているが、それと同様の思考が道長や倫子との交渉を記した歌の前後の文章の中に、半ば無意識的ににじみ出ていることに注意しなければならぬ。日記中の歌に前後する散文の中には、家集の詞書とは異なつた作者の思惟やあからさまな感情の片鱗が写しとられているのである。

上達部、座を立ちて、御橋の上にもまり給ふ。殿をはじめ奉りて擁うち給ふ。かみのあらそひいとまさなし。

歌どもあり。「女房さかづき」などあるをり、いかがいふべきなど、くちぐち思ひこころみる。

めづらしき光さしそふさか月は
もちながらこそ千代めめぐらめ

「四条の大納言にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ用意いるべし」など、ささめきあらそふほどに、ことおほくて、夜いたうふけぬればにや、とりわきても指さでまかで給ふ。

(寛弘五年九月十五日)

日記では女房さかづきと指名された折の用心意にと思ひ思いに準備したにもかかわらず、格別の指名もなかつたとし、家集の「さかづきの折に、さしいづ」とある詞書と齟齬する。恐らくこの時に詠まれた歌は後に道長家に献詠されたであろうから、実際的には両者の記述にそれ程大きな差はなかつたであろう。しかし家集では、歌そのものを導き出すための詞書が必要とされるのに対し、日記では歌を含む四冊の状況がどう運ばれていたか、その事実を記すことが要求される。日記において歌は独立したものでなく、行事の一部として認識された一事実であり、この意味で日記における式部の叙述態度は、彼女がいかに事実^ニ忠実であつたかを証するものと言えよう。と同時に、中宮女房として晴儀の席で歌を献詠することをその任として期待され、式部自身もそのことを自覚しながら、公卿達の都合でその用心意が無視されてしまふ女房の立場の弱さを、ここに事実^ニを記すことによって、一種の恨みをこめて式部はかみしめずにはいられたのであつたのである。

またの夜、月いとおもしろし。ころさへをかしきに、若き人は舟にのりて遊ぶ。色々なるをりよりも、おなじさまにさうぞきたる、やうだい、髪のはまたの夜、月のおもしろし。ころさに、若人たちは舟にのりて遊ぶを見やる。中島の松の根にさしめぐる

ど、くもりなく見ゆ。小大輔源式部……など、はし近くゐたるを、左の宰相の中將殿の中將の君いざなひいで給ひて、右の宰相の中將兼隆に棹させせて、舟にのせ給ふ。かたへはすべりとどまりて、さすがにうらやましくやあらむ、外見いだしつつあたり。いと白き庭に、月の光りあひたる、やうだいかたちもをかしきやうなる。

(寛弘五年九月十六日)

日記は舟遊びする女房、それを誘い出す公達の名をも記して記録としての体裁を整えているが、歌は収載していない。家集に残された歌は、「曇りなく」「千年にすめる」「のどけし」と慶祝の意をこめたことを重ねて賀歌的発想をしているが、前日条の「めづらしき……」の歌と比べると「千代」「千年」と類似の語を用い、月の光を皇子誕生という慶事にたとえるなど、歌としては相似た趣向のもので、日記にとりあげるのをやめたのであろう。またこの歌は同じく賀歌的な発想に立つものといひながら、式部の口に自ずと口ぐさまれたもので、行事の一環をなすものではない。紫式部日記においては、行事儀式の記録の中に私的な歌が記されることは一度もな

紫式部日記における歌の場面について

ほど、をかしく見ゆれば

曇りなく千年にすめる水の面に

やどれる月の影もの

どけし

いのであり、その点から言ってもこの歌を日記の中にとりあげなかったのは、式部の一つの見識を示したものと云うことができよう。かわつて式部は、この後に祝意を表しに道長邸を訪れた内裏女房のことを記すことよつて、慶祝の意を表現した。栄華の記録としての紫式部日記には、内裏女房の訪問とそれを迎えた道長の満悦は欠くべからざる事項であつたのである。

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事はつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東おもてに殿の君達宰相の中將など入りて、

御五十日の夜、殿の、「歌よめ」とのたまはすれば

さわがしければ、ふたり御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせ給ひて、ふたりながらとらへす多させ給へり。「和歌ひとつつかうまつれ。さらばゆるさむ」とのたまはす。いとわびしく恐ろしければ、聞こゆ。

いかにいかが数へやるべき八千年の世をば
殿の御
芦田鶴のよはひしあらば君が世の

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまりひさしき君が御代をば

千年の数もかぞへとりてむ

「あはれ、つかうまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせ給ひて、いと

疾うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の
千歳のかずもかぞへとりてむ
さばかり酔ひ給へる御心地にもおぼし

けることのさまなれば、いとあはれに、
ことわりなり。げにかくもてはやしき
こえ給ふにこそは、よろづのかざりも
まさらせ給ふめれ。千代もあくまじく、
御ゆくすゑの、数ならぬ心地にだに思
ひつつけらる。

(寛弘五年十一月一日)

酔った道長に歌よめと強要されて賀歌をよみ、それをめでた道長が
乱酔にもかかわらず素早く返歌した。そのことのためでたさが内容の
めでたさを倍加し、式部は若宮の未来を祝福せずにはいられない。
ここでも主従二人の機智ある贈答によって、みやびの世界が築き上
げられている。このような場合に主人に歌よめと求められること
は、式部にとって行事の一部として半ば公的な事項に属し、その贈
答を記すことがまた式部の職掌でもあった。しかし一方式部は、歌
をよむにあたって殿の態度が「いとわびしく恐ろし」かったと記す

ことを忘れなかった。その歌により、また日記の記述により、道長
家の栄華にこの上なく祝意を表しつつも、式部は己が立居振舞にま
で無遠慮にずかずか入りこんでくる道長の態度に我慢できなかつ
たのであり、ここにおいても散文は、小さくはあるがキラリと光る
厳しさをもって式部の痛苦を写し出しているのである。

小少将の君の、文おこせ給へる返りご
と書くに、時雨のさとかきくれば、
使もいそぐ。「また空のけしきも心地
さわぎてなむ」とて、腰折れたること
や書きませたりけむ。暗うなりにたる
に、たちかへり、いたうかすめたる濃
染紙に

雲間なくながむる空もかきくらし
いかにしのぶる時雨なるらむ
かきつらむこともおぼえず、
ことわりの時雨の空は雲間あれど
ながむる袖ぞかわくまもなき

(寛弘五年十月)

ただ、えさらずうち語らひ、すこしも

時雨する日、小少将の
君、里より
雲間なくながむる空
もかきくらし
いかに忍ぶる時雨な
るらむ
返し

ことわりの時雨の空
は雲間あれど
ながむる袖ぞ乾く世
もなき

里に出でて、大納言の

心とめて思ふ、こまやかにものをいひかよふ、さしあたりておのづからむつび語らふ人ばかり、すこしなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。大納言の君の、夜々は御前にいと近うふし給ひつ、物語し給ひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か。

浮き寝せし水の上のみ恋しくて
鴨の上毛にさえぞおとらぬ

返し、

うちはらふ友なきころの寝ざめには
つがひし鴛鴦ぞ夜半に恋しき
書きざまなどさへいとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。

(寛弘五年十一月)

両者共、宮中において式部と最も親しかった同僚女房との贈答である。準公的な日記としての性格を有する紫式部日記にあっては、私的な贈答や独詠歌は行事と行事の谷間に埋めこまれた形で記されているが、この二者の贈答もその例に洩れない。が、繁雑なまでに精

紫式部日記における歌の場面について

君、文たまへるついで
に浮き寝せし水の上
のみ恋しくて
鴨の上毛にさえぞおとらぬ

返し

うちはらふ友なきころのねざめには
つがひしをしぞ夜は
に恋しき

しい行事記録の中にあつて、このような贈答が記されることは、日記に柔軟さを与えると共に筆者の实在感を増幅し、ひいてはその筆者の手になる行事記録も現実感を増すことになるのであつた。少将の君との贈答においては、前文の時雨のさとかきくれば、使もいそぐ。(中略)暗うなりにたるに、たちかへり、いたうかすめたる濃染紙にとあることにより、その現実感は一層重みを増す。がここにおいても、歌の前文は家集の詞書のごとく直線的に歌に向うのではなかつた。式部は少将の君に対し、前に「かきつらむこともおぼえず」返歌を贈つたという。しかし、式部が同じ日に少将に贈つた歌を忘れたとは考えられない。このように日記における歌は、必ず式部のポーズにくらまされつつ登場するのであつた。思うにこのようなしつつ、自らその中に馴れ染んで、同僚女房との間にこのような歌のやりとりをすることへの式部の羞恥であり、軽い自嘲でもあつたろう。

この例が更に顕著に示されるのは、十一月の式部里下り中の大納言の君との贈答である。贈答歌そのものに見る限り、二人は互いに相手を恋しく求めあうに過ぎない。しかし歌の前文に目を移すと、式部の思惟は贈答歌に向つてなめらかにすべて行こうとはし

ないのである。式部は、物語にも興がのらず、宮仕え前の友人とも疎遠になって、実家にいると別世界に來たとの感をさえ抱くと孤独感を述懐しつつ、一方では宮仕え生活をうとましく思いながら、その環境に慣れて宮中でむつび合う友をなつかしく思う矛盾した心を慨嘆する。大納言の君との贈答は、そうした屈曲した心理の上に出されてくるのである。式部の歌は「浮き寝」「水の上」「鴨の上毛」と縁語を重ね、「浮き」に「憂き」をかけた凝ったものであるだけに、かえってそこに封じこめられた孤独が、読む人の心に強くつきささる。まことに式部においては、このような友との贈答においてさえ、歌と散文は相拮抗しつつ抵抗感を生ぜしめ、それがためにかえって両者の機能は補強し合い、印象を強めることになるのである。

「かの女御の御かたに、左京馬といふ人なむ、いと馴れてまじりたる」と、宰相の中將むかし見知りて語り給ふを、一夜かのかいつくろひにてゐたりし、ひんがしなりしなむ左京と、源少將も見知りたりしを、物のよすがありて伝へ聞きたる人々、「をかしうもありけるかな」といひつつ、いざ、知らず顔

侍従宰相の五節の局、宮のお前いとけ近きに、弘徽殿の右京が、一夜、しるきさまにてありし事など、人々言ひたてて、日かげをやる。さしまぎらはすべき扇など添へて

にはあらし、むかし心にくだちて見ならしけむ内わたりを、かかるさまにてやは出で立つべき、しのおと思ふらむを、あらはさむの心にて、……。(中略)

多かりし豊の宮人さしわきてしるき日かげをあはれとぞ見し

大輔のおもととして書きつけさす。
おほかりし豊の宮人さしわきて
しるき日かげをあはれとぞ見し

(寛弘五年十一月二十三日)

もと内裏女房であつた左京が舞姫のかしずき役をして、中宮方の女房から悪意を含んだ凝った悪戯をされている。紫式部日記には、左京への皮肉な贈物に趣向をこらすさまがくわしく描かれていて、この一件に対する紫式部の一方ならぬ肩入れの様子が見てとれる。このような意地悪が日常化されているところに後宮社会の女房心理がまざまざと見てとれるのだが、式部はそのことに一片の反省も抱いてはいない。歌の前文は一直線に速度を増しつつ、「おほかりし」の歌に向つてゆく。ここではこれまでの歌に対する散文にみられたような抵抗感覚は失せている。思うにこのことは、前身を隠しおおせるつもりでのこのこと宮廷社会に顔を出した左京の無神経さへの式部の仮借ない批判を、また同時にそのことを己が恥とする式部の一途な心情をも表わしているのであろう。式部は左京の上に女房と

しての自己の分身を見てとることにより、かえって左京に対して苛酷になりえたのであり、それがために散文から歌へと抵抗なく移行しえたのである。

行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよつくりひみがかせ給ふ。世におもしろき菊の根を、たづねつつ掘りてまある。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老もしぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことの少しもなめなる身ならましかば、すぎずきしくもてなし若やぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほもの忘れしなむ、思ふかひもなし、罪も深かなりなど、明け

家集では別本系にのみ所載

紫式部日記における歌の場面について

たてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊びあへるを見る。

水鳥を水のうへとやよそに見む

われも浮きたる世をすぐしつづ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆ

れど、身はいとくるしかなりと、思ひ

よそへらる。

(寛弘五年十月)

右のくだりについては、既に秋山虔氏に詳細な御分析がある。^⑩氏はこの一文の最初から「げに老もしぞきぬべき心地するに」までを(A)、「まして、思ふことの少しもなめなる身ならましかば、…常なき世をもすぐしてまし」を(B)、「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても……いと苦しき」を(C)、「いかで……水鳥をの歌」を(D)と区分された上で、(A)↓(B)↓(C)↓(D)の展開が「それ自体として独自の統一的な論理を内蔵するところの、ひとり歩きする客観的世界をかたちづくっている」ことを証明されようとする。即ち(A)は作者らの思いを「一般的に規定する客観的な場、ないし状況の措置」、(B)は「自分がそこに生きる世界を讃歎し、それに共感を示すとともにそこから自己を峻別してゆく志向」を示し、そこから自然に(C)の「いちずの苦惱表現を

みちびき出す」のだが、それらは互いに「矛盾しながら緊張的に統一される世界を形成する」のである。「(A) ↓ (B) ↓ (C)」までは土御門第の雰囲気からはじき出されるような苦患にみちた精神、季節はずれの精神の軌跡であるが、そうした精神も、それがしよせんはこの邸に奉仕する一女房のそれ以外ではないとすれば、自己を孤絶的な苦悩におしすすめるには堪えきれぬものではないのであった。ここに (D) は、「わが深刻な内面性を対象化することによって自己をそこから脱出させるための媒材として、池の面にあそぶ水鳥が歌に射止められるという段どり」になる。野村精一氏によれば、^⑧「歌―これは自己解放のための機能をもつことばだった。ようやく現実の存在を回帰した作者に、他者の中に自己を認識するだけの余裕が生まれた。それが『思ひよそへやる』であつた。ここで我々は又もや、己が身を置く華やかな世界から退転しつつ水鳥の歌に自己解放していかねばならない、低迷し屈曲する式部の心的過程に突き当らざるを得ないのである。日記におけるこうした式部の思考は、散文を記しつつ新たな展開をとげていったということができよう。

しはずの廿九日にまゐる。はじめてま
ありしもこよひのことぞかし。いみじ
くも夢路にまどはれしかなと思ひつ
れば、こよなくち馴れにけるも、う

家集では橘常樹本と別
本系にのみ所載

とましの身のほどやとおぼゆ。夜いた
うふけにけり。御物忌におはしまし
れば、御前にもまゐらず、心ほそくて
うちふしたるに、前なる人々の、「う
ちわたりはなほいとけはひことなりけ
り。里にては、いまは寝なましものを。
さもいざとき履のしげさかな」と、い
ろめかしくいひゐたるを聞く。

としくれてわが世ふけゆく風の音に
心のうちのすさまじきかな
とぞひとりごたれし。

(寛弘五年十二月二十九日)

師走のある日、式部は初出仕の頃を思い出すにつけて、宮仕え生活
を限りなく憂きものとしながらその宮仕え生活に慣れてしまった我
が身を厭わしく思い、若い女房の色めかしい話を聞きつつ、情事に
対する興味も関心も失ってしまった我が身の老いを感じて、索漠た
る心情を歌に託してゆく。式部は女房の局を訪れる公達の履音の繁
さや、若い女房達の話にあらわされる宮廷社会の色めかしい一面と、
さだすぎた我が身を対置することにより、より荒涼たる心境にのめ
りこんでゆくのであるが、その思いは「とぞひとりごたれし」と日

記に記されているように、その場の人々には理解されようはずもなく自然と口ずさまれ、式部の胸にたたみこまれてしまったのであった。ここでも歌は、四冊の状況に融合しえない式部の孤独を盛りこむものとして打出されている。この歌は水鳥の歌と共に日記随一の佳什と目されるものであるが、紫式部集には両者共採られていない。^⑩ 思うにこの事実は、式部のこれらの歌に対する愛着が強ければ強いものであるだけに、そこに込められている悲嘆、絶望感が短い詞書では伝わらないのを憂慮した結果であろうと思われる。

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覽

じて、例のすずろごとども出できたる

ついでに、梅のしたに敷かれたる紙に

かかせ給へる、

すぎものど名にし立てれば見る人の

折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

たまはせたらば、

人にまだ折られぬものを誰かこの

すぎものぞとは口ならしけむ

めざましう」と聞こゆ。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと

紫式部日記における歌の場面について

聞けど、おそろしきに、音もせで明か
したるつとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞ

まきの戸ぐちにたたきわびつる

返し、

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑ

あけてはいかにくやしからまし

人、つとめて

夜もすがらくひなよ

りけになくなくぞ

まきの戸口にたたき

わびつる

返し

ただならじとばかり

たたくひなゆゑ

あけてはいかにくや

しからまし

右の二組の贈答歌はいずれも詠作時期が詳かでなく、古来諸説紛々としてきた箇所である。その詠作時期については、この直前の「十一日の暁」条のそれと共にいずれ稿を改めて論じたいと思う。が、ここで明らかに言えることは、この二組の贈答が紫式部の手によってこの箇所へ置かれたのではなく、後人の補入によるものであるということである。この日記における贈答は、式部と道長の女郎花の贈答を見ても明らか如く、前後の文がそれぞれ自体として一つの完結性を有しつつ、その中から歌を打出してきていた。それに比べてこの二組の贈答の前文は、歌の詠まれた場所、人、状況を一つのセンテンスの中におさめて和歌に渡しこむ役割を果しているの

であり、詞書の域を出ていない。この二組の贈答の後人補入説は、つとに堀部正二氏の主張されるところであり、氏の御示唆はまことに正鵠を射たものと言わねばならないであろう。従って、当然のことながら、この二組の贈答は、紫式部日記の歌の場面对象とする考察から除外しなければならないのである。

紫式部日記においては、右の梅と水鶏の贈答を除いて、歌を中心とする十の場面が設定されている。うち紫式部自身の歌は九首であるが、そのうちわけは社交的な贈答歌あるいはそれに類するもの四首、賀歌三首、独詠歌二首である。既に縷々述べ来たったように、これらの歌は五節の歌を除いて、前後の文に渾然とこかし込まれ、あるいはその中から直線的に打出されて来るのではなく、必ず何らかの抵抗感を伴って打出されてくる。歌はそれが公的奉養と私的憂悶の告白たるを問わず、作者の心の一面の真実をうたいあげたものであった。この意味で歌を作者の心と目的に向って射こまれる矢にたとえるならば、その前後の散文は矢を射るべくひきしほられる弦にもたとえられよう。紫式部日記ではその弦が直線的にではなく、じりじりと弾力的にひきしほられることによって、矢を放つ行為自体にしたたかな手応えがあり、射られた矢はまさに的の中心を射めくのである。紫式部日記の散文部分において作者の思考が眼前の対象から何度か自己内面へ向って回帰してゆくことは、しば

しば指摘されるところであるが、歌の場面に見られる抵抗感にもこの思考の二面性が指摘されうるのではないか。この日記の歌の場面における抵抗感とは、抵抗感そのものが歌に凝縮される場合（二つの独詠歌がこれに属する）と、歌と散文が相拮抗している場合（賀歌と社交的な贈答歌がこれに属する）とを問わず、その抵抗感とは必ず式部が身を置く四囲の環境に対するそれなのである。このことは散文から歌へと抵抗感なく進んでゆく唯一の例外である五節の歌が、この抵抗感の裏返しであるところの式部の自虐に支えられていることによっても証し得よう。

式部は眼前の栄華の世界から疎外されつつ、主家繁栄の記録をなさねばならなかったことを撥条として、私的憂悶をしかと己が核として胸に抱き、そこから讚美する自己を凝視しようとするのであったが、自己内面の真実をうたった歌に逢着するとき、そこに無聊の心のゆらめきを感じずにはいられなかった。式部は、自身の歌が真実をうたうものであればあるだけ、その歌を詠ませた四囲の環境に対する疎外感をかみしめねばならなかったのであり、散文において抵抗感を書きとどめずにはいられなかったのである。紫式部日記は、親王誕生を中心とする主家の栄華を記すことを中心の柱として、幾度かその筆を自己内面に回帰させているが、このようにあらわにされた内的告白の他に、作品の細かい變の中に作者の憂悶が

たたみこまれていることに注目しなければならぬ。まこと日記において、歌とそれを導き出す詞書とからなる家集とは異なって、持続的な思考が可能であり、それがために歌と散文はそれぞれの位相を保ちつつ、両者が結合することにより、日記の中で独自な展開をとげてゆくことができた。そしてその思考は日記を記すことにより、ある時は事件当時の心理にたちかえり、あるときは執筆時における心情をなまかせて、一つ一つ式部の筆がさぐり当て、すくいといったものだったのである。紫式部日記における歌の場面は、日記を書くという営為によってはじめて歌と散文の位相を確立し、新たに形成されていったものだとすることができよう。

(註)

- ① 南波浩先生「紫式部集」有精堂刊『源氏物語講座』第六卷
- ② この他に別本系、並びに古本系の橘常樹本には、後世紫式部日記によって補ったと思われる歌があるが、それはここでは含めない。
- ③ 以下本文の引用は南波浩先生『紫式部集の研究』の「定家本系校定本文」による。また紫式部集の伝本の分類、及び伝本間の異同についても同書によった。
- ④ 以下本文の引用は岩波文庫戦後版『紫式部日記』による。
- ⑤ 「紫式部日記冒頭の解釈」『紫式部日記の新展望』所収

紫式部日記における歌の場面について

⑥ 註⑤に同じ。

⑦ 拙稿「紫式部日記の始発―道長家栄華の記録」『国文学攷』昭46・6

⑧ この歌は紫式部の歌ではないので、当然紫式部集には採られていない。

⑨ 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』二、五二三ページ。

⑩ 「紫式部の思考と文体(二)」『源氏物語の世界』所収

⑪ 「紫式部の文体」『源氏物語文体論序説』所収

⑫ 家集では、水鳥の歌は別本系のみ「水鳥どもの思ふことなげにあそびあへるを見」として、また「年くれて」の歌は、橘常樹本と別本系に採られているが、その詞書は日記とほぼ同じである。従ってこれは後人の手により、日記から家集に補遺されたことが明らかであり、これらの歌を採用していない定家本系並びに古本系の方が古態を示すものと言えよう。

⑬ 「紫式部日記雑攷」『中古日本文学の研究』所収